

## 百合の国・日本

江戸時代の文政六年（1823）、1人の植物好きのドイツ人医師が日本にやってきた。シーボルトである。日本に関する情報は長崎からオランダの東インド会社を経由してヨーロッパに伝えられていた。日本から帰国したケンペルやツェンベルクの旅行記をシーボルトは読んでいた。日本に興味を抱き、来日し、追放された後に日本学とよばれるようになる日本研究を行う。

文政十一年（1828）、シーボルトは長崎の出島に植栽していた生きた植物をオランダ船ハウプトマン号に積み込みヨーロッパに送り出す。このなかにバミュダリリーとして園芸界にセンセーションを巻き起こすテッポウユリがあった。この船に禁制の地図などが積み込まれる予定であったが台風によりそれが発覚したため乗船できなかったが、これらの荷は1829年にオランダのライデンに到着した。80種が枯れ、1844年までに生き残ったのは40種。

日本の禁制品の地図などを持ち出そうとしたため永久追放の判決を受け、1829年10月22日、シーボルトはジャワ号で帰途へ。485種1200個体の生きた植物が積み込まれた。1830年7月8日にベルギーのアントワープに入港し植物も陸揚げされた。生き残ったのは球根を含め260個体。それらはポイテンゾルフの植物園で馴化されたあと、オランダに送られた。

カノコユリ、ヤマユリ、ウバユリ、ノヒメユリ、スカシユリなどが当時のヨーロッパの人びとを驚嘆させた。たとえばカノコユリは「きらめく濃い赤色のいぼ状突起がある、ピンクがかった輝くばかりに白い」。

カサブランカなど私たちが西洋のユリだと思っているユリの園芸種のほとんどは日本から移出したヤマユリ、カノコユリなどの交配によってヨーロッパでつくられた。

ツバキ、バラ、ユリ、ツツジといった植物は園芸植物として国際的に利用されている。原種は比較的小さく、しかも一重の花をもつが、園芸化が進むとともに花が大型化して八重咲きになり、白い花であったも

のでは白以外の花色をもつものがつくりだされる。

現在、ヨーロッパの人たちが日本の植物としてまっ先に名前をあげるのはユリである。ユリの園芸化にはヤマユリ、テッポウユリ、カノコユリなど日本の野生のユリが大きな役割をはたした。そしてこれらをヨーロッパに移出し紹介したのがシーボルトであった。ヨーロッパ庭園に日本の植物を、という彼の願いは、結果的に、日本の植物が国際化する道を切りひらいた。 出典：大場秀章（執筆時、東京大学総合研究博物館教授・植物分類学）『江戸の本草学』（1999年、東京大学出版会）。

## 菅家の栽培した野の百合

1983年に花の栽培を奥会津・昭和村ではじめた。オミナエシ、リンドウ、グラジオラス、かすみ草などのほか、村内に自生していたヒメサユリ（オトメユリ）、ヤマユリなどの種子を秋遅くに集め播種（たねまき）した。しかし冬期間の積雪下で、野ネズミにすべて球根を食べられてしまい、ユリ生産は断念し、その後かすみ草専業に特化した。ユリの生産はとても難しい。

奥会津の隣は会津と越後の国境（江戸時代には藩境は国境であった）を経て魚沼である。魚沼の堀之内は花の栽培、特に雪国の特徴である雪の保温性による宿根・球根類が越冬することを利用して、シャクヤク類、オミナエシ、ナルコユリ、ユリ類の栽培・生産が進んでいた。

奥会津では、2mの雪があるため、畑（圃場、雨よけハウス）でかすみ草も冬に根が越冬する（北海道では雪が少ないため気温零下で地中也凍るため根が凍死する）。

## 埼玉園芸市場

昭和花き研究会は1984年に福島県奥会津の昭和村大岐（おおまた）集落で設立。出荷先は新潟、大阪、そして埼玉園芸卸市場であった。創設以来現在まで25年間、昭和花き研究会は出荷を継続している唯一の生花卸市場である。故・加藤常務との付き合い後、若い山下氏の担当となっている。

## 魚沼の鈴木君の育てるユリ

昭和花き研究会は1997年にウェブサイトを開設公開してきた。その後ブログ等を開設している。2006年2月2日にブログを開始した鈴木健市君。その2月24日のブログに貯蔵したユリの球根の芽の様子を顕微鏡で観察する記事があり、そのことについてコメント投稿したのが彼とのつきあいはじまりでした。その後、4月15日に残雪のある彼の自宅（魚野地）を訪問しますが留守でした。彼は、地域の子どもたちにユリの球根を植える体験、収穫する体験、、、いまでは「花育」と表現されますが、そうした取り組みを2年間行いました。その初年度に写真で記録をする作業で訪問することにしました。そのなかでユリ栽培を支える地域の仕事の仕組みが見えました。

魚沼地方はお米のコシヒカリの産地として有名ですが、そのコシヒカリの茎であるワラ（稲藁）を、ユリを植えた畑に敷きわら（マルチング）として直射日光から土中の球根を保護し、雑草が生えるのを守り、雨による泥はねから葉を守ります。稲を作ることが、ユリを育てることにつながっていました。生育が進むと、生育していく葉を夏場の強い紫外線から守るために簡易なパイプハウスを建て、日除けの黒い網で覆います。つまり木陰を作りユリを守るのです。奥会津や魚沼のユリの自生地を観察してみるとそれは林縁部です。森と野の境に自生しています。あまりにも日陰になると生育できず、かといって一日中陽があたってもだめです。半日陽があたるような環境、それが林縁部です。

自生環境を復元する、、、森には落ち葉が土を守っています。それを水田で育てた稲のわらを利用して再現します。樹木による半日陰は、鉄のパイプを曲げた簡易なハウスに寒冷紗とよぶ日覆いをして日陰を作ります。露地雨よけ栽培というのは、かすみ草でも同じです。花が咲くときだけ屋根にビニルを被覆します。

魚沼は百年産地を目指しています。地域が育ててきた草花・葉にはナルコユリやシャクヤクがあります。鈴木君が住む地域を訪ねてみると、道沿いに看板がありシャクヤクの品種育成をしている人びとや、ユリの球根をオランダから輸入して、貯蔵しな



がら適切な時期に出庫配布している事業所などがあるのがわかります。

自然を生かす省エネルギー 雪国の花  
露地雨よけ栽培：連絡先  
環境負荷低減プログラム  
M P S # 認証

M P S 8 0 3 1 4 2  
ユリ・シャクヤク・ナルコ等  
新潟県魚沼：すずきの百合  
鈴木健市  
0 9 0 - 9 3 9 0 - 2 6 8 7  
suzukinoyuri@gmail.com  
基本データ<http://web.uct.ne.jp/lily/>  
日録[http://blog.goo.ne.jp/suzuki\\_no\\_yuri](http://blog.goo.ne.jp/suzuki_no_yuri)



M P S 8 0 2 2 4 9  
かすみ草（六月～十月）  
会津：昭和花き研究会  
カンケ 菅家博昭  
0 9 0 - 2 2 7 2 - 2 7 8 0  
kaken@cocoa.ocn.ne.jp  
(カケン@)

基本データ<http://www.showakaki.jp/>  
日録<http://kanke.cocolog-nifty.com/>

